

第14回全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in あいち 参加報告書

日時：平成31年2月9日（土）12:30から2月10日（日）16:45まで

場所：名古屋工業大学

愛知県名古屋市昭和区御器所町

内容：テーマを ひきこもりを「私の問題」から「私たちのチャレンジ」へ
ひきこもりを社会全体の問題として考え、未来に希望が持てる社会の実現を目指す
目的で開催された。

報告者：成川正幸

スケジュール

2月9日（土）

12:30～ 開会

12:45～ 全体シンポジウム

15:30～ テーマ別分科会（Ⅰ-⑥教育）

18:30～ 懇親会

2月10日（日）

9:15～ テーマ別分科会Ⅱ（Ⅱ-⑰行政連携）

13:45～ 分野横断ワークショップ（この指とまれワークショップ）

16:00～ 結び「それぞれの旅路」

※分科会Ⅰは、困窮、依存、多文化、性、精神障害、教育、はたらく、家族、発達特性、
シンポジウム振り返りワークショップなど10の分科会が開催された。

分科会Ⅱは、余暇・たまり場・居場所、住まい、家族支援、ピアサポート、多様な学び、
アウトリーチ、非行、行政連携、地域、ともに働く、わたしの働く、評価など12の
分科会が開催された。

分野横断ワークショップは、パネルトーク、この指とまれワークショップ、アートワー
クショップの3つで、その内のこの指では、座長を務めさせてもらった。

内容

基調報告「権利としての若者協同実践」の確立に向けて

シンポジウム 想いをつなげる「ことば」を探る－排除・適応・棲み分けを超えて

基調報告「権利としての若者協同実践」の確立に向けて

シンポジウム 想いをつなげる「ことば」を探る－排除・適応・棲み分けを

14 回目の今回は、「私の問題を私たちのチャレンジへ」をテーマに勇気をもって社会に出ていけない若者の問題を一緒に考えるいい機会にしたい。

この交流会を開催し、社会のテーマも広がってきて集会のテーマも広がってきた。支援者だけではなくて、行政、若者自身も参加するようになってきた。

若者の問題は社会的な問題として行政も動き出した全国には、若者サポートステーションが750か所できた。支援者同士が競争させられている。本当の支援とは。協同実践とは何かをあらためて考えてみたい。

シンポジウム

司会進行：南出吉祥 氏（岐阜大学 JYC フォーラム）

シンポジスト：石井正宏 氏（NPO 法人パノラマ）

泉翔 氏（NPO 法人ウィークタイ）

岡 檀 氏（統計数理研究所医療健康データ科学研究センター）

野々村光子 氏（働き・暮らし応援センター “Tekito”）

岡 檀 氏

「日本で最も自殺が少ない町の住民たちの語録」

平成の大合併で3318市町村を30年間で調査し、ランキングを付けた。

「徳島県海部町」今は合併し海陽町になっている町に2008年に初めて入った。

「いろんな人が、いたほうがいい」今風で言えば多様性のある町。その町は、「赤い羽根募金が集まりにくい町」と言われている。その理由は、「わけのわからんものはしない」募金箱が回ってくるとお金を入れるのではなく、自分が納得しなければ行動しない。ケチではなく、知らないものは出さない。そんな人が多いから。

自分はやるやらないを決めるが、やらないといった時点でいじめられる世の中。そうではなく、いろんな人がいたほうがいい。いてもいいのではなく、いたほうがいい。

「おまいにも、できることがある」

自己効力感（「自分が行為の主体であると確信していること、自分の行為について自分がきちんと統制しているという信念、自分が外部からの要請にきちんと対応しているという確信」）を持っていること。

やればできるとは違う。熱血系でやればできるという人はいるが、やってもできないことがたくさんある。おまいにもできることはあるというのは、できないことをやるのではない。

「一度目はこらえたれ」

見逃してやれ。許してやれ。これは、警告ではない。たった一度の失敗でレッテルを張らない。挽回のチャンスがある。

「関心があるんや、監視しとるんやない」

町では、常に噂話で、どこへ行っても何をしていても見張られているよう。興味津々など

け。

「病は市に出せ」

市＝市場である。納得のいくリスクマネジメント。町の人たちは「自分のため」小さいうちに救いの手を差し伸べる。そのほうが得。

野々村光子

その人のちょうどいい働き方を模索している。

宝くじにあたって遊んで暮らしたいと思う人が多いのでは。

「50m 走よりフォークダンスを踊ろう」と言っている。知り合いができる社会が大事。

「働く」の概念は何か。その人の暮らしをだれが知っているのか

「未来への下ごしらえ」この地域、田舎の10年後がどういう地域であれば良いのか？
いろんな人がいたほうがいい。

「生きづらい人が住める町ではだめ。生きづらい人が住んでいる町にしよう。」

働く働かないよりも人と出会ってない人に出会いのほうが重要ではないか。

「人生にミスはない」

泉 翔 氏

どのように生きるかの前に生きる意欲が欠けている。ポジティブの感覚が生きるにつながる。生きることに希望がない時代。生きる意欲を持ってない人に支援しても無理。自殺しようとしている人に「これからどうやって生きていくつもり」と聞く人はいない。
居場所は、どんなステージにも必要。対話主義は1+1=3が面白いと思えること
引きこもりを出す方法で簡単なのは「暴力」。しかし、自分が目指すところは幸せに生きる
ことなので、暴力は合わない。

石井 正宏 氏

10年間誰とも口をきかなかった人が夜中にスピッツのチェリーを唄ったら近所から苦情がきた。奇跡だ。

遊び心で破壊的イノベーションを起こしたい。

好きな言葉は、「ノーマジック ノーライフ 全ての人をフレームイン！」

パノラマ写真は普通の写真だと写らなかった人も入る。引きこもっている若者は親と先生以外と出会ってないからストライクゾーンがすごく狭い。狭いところにボールを投げ込んでくる人は少ない。学校の中に忙しい大人しかいない。支援者の自分が忙しかったら相談にも来ないのではないかと考えた。

ボルタリングのつかむところみたいに多く言語化していくことが重要。

信頼貯金を貯める。小さく丁寧な支援を大きく発信していく。

家が安心して過ごせる場所ではないので、誰でも来ていいよというのもやっている。

ただ、食べ物の取り方を見ていると普段食べているのかどうかわかる。そこから支援が始

まる。

アルバイト経験がないと正社員になるのが難しい。

アルバイト中、学校や施設よりもバイト先のほうが家庭の問題が見える。アルバイト先がシェルターになっている。

言葉を大切にしながら支援している。

パネルディスカッション

海部町は同調圧力がないのではないかと。他人と同じことをするのではなく、違う人たちがハブになっているのではないかと。

海部町は、移住者の町。地縁血縁の強い地域ではない。多様性を重視しないとうまくいかない。人をちゃんと見る能力も養われたのではないかと。大きくなりすぎないようにする。栄えているとは思わない。大きくなりすぎると細分化する。

生きづらい。顔が見える関係は、プラスとマイナスがある。

田舎では、引きこもっていることは、まだまだ言うてはいけないように感じる。

引きこもっていることも生きていて、変わらないはずである。

多様性を認める難しさを感じる。

支援者の私たちも実は、自分たちも多様性を認めていないのではないかと。引きこもりの若者を見る目が厳しかったとする。企業の人の方が多様性を認めていると感じることがある。

「変な大人がいい」

今の世の中は、同じような人が集まる傾向がある。均一化集団で、みんな同じ色で同じ考え方ではなく、変な人を混ぜることが今の世の中に必要ではないかと。

よく言われるのは伝わり方。

今の福祉業界は「ダメ」「あかん」

知的障害者を就職させるときに訓練してどうなったのかではなく、どこが素敵かの情報が欲しい。

聞く力が弱い人が多い。言葉化していることが難しくなっている。

分科会 I 新しい教育文化の創造 生きづらさを抱えた若者の支援を通して

定森 恭司 氏（心理相談室 ころ 愛知）

○新しい教育文化創造

実際に支援をする中で出会った若者との事例をいくつか紹介していただき、いきづらさを抱えた若者や心理危機に陥りやすい生活の場について、これからの時代に求められる教育と一緒に考えていきたい。子どもたちを支援関係の場から感じてきたことを伝えたい。

○実践の原点

半田児童相談所に勤務時、戸塚ヨットスクールの戸塚氏と出会う。無気力の子供たちを

ヨットに乗せて自殺志願の遺書を持っている子を海に放り込む。そして頭をもって海に沈め、最後の一飲みで助ける。ごめんねといいながら、明日また連れていく。そしたら子供は遺書を破る。そう言って高笑いされた。最後の一飲みが間違ったらどうするのかと尋ねると、「これで仕事をやっている。運命だ！」

戸塚氏のその言葉が許せないと思った。耐えられない子供たちは近くの派出所に逃げる。保護した子供たちに親の委任状をもって弁護士が来てくれる。その委任状には「戸塚に返してくれ」と書かれている。それで、海に飛び込んで死んだ子がいた。体罰が許せない。そういうことがあり、決心し、地域で支える、グループ指導、親の会を立ち上げた。当時の中学生は卒業証書もらえない子がたくさんいた。

○その子の中に居場所を作る

いろいろな子供たち、いろいろな親に会ってきた。日々悪戦苦闘している。現在行われているのは、一時保護の 92%は自宅に返している実態。施設がいっぱい。里親がない。帰る場所がない。地域に受け皿がない。地域の中で家庭支援、在宅で支えようとする団体の活動、地域で支える包摂の場がなければ出口がない。教育とは生き延びる力を学ぶ場。生きている実感、幸せと覚えることが重要。いきづらい子供たち こぼれてくる。影を背負う子をしっかり支えるとその場が変わる。たった一人で地域を変えることが出来る。みんながどうするのか考える場を作ってあげると変えられる。場づくり。空間を作るのではない。その子の中に居場所を作ってあげること。昔は村という共同体意識があった。知らずに村意識が出来ていた。都会だと地域共同体の絆は薄くなる。習慣が違う人が集まってくる。社会文化の特徴、地域社会、生きる場を考える どんな特徴をもっているのか。この場を考える必要がある。

○自己責任で生きる時代

子どもたちには親密な大人、親密な他者がいない。程良い距離をとる人がいなくなった。また会いたくなる関係を作ることが必要ではないか。世代、地域の当たり前が今と昔は違う。昔は、変なことを言えば村八分だった。今は集団圧力がなくなったが、自己責任で生きなくてはならなくなった。50代ぐらいの親に多いのが、自分は親とぶつかったので、自分の子には自由にさせる。お子どもからしたら何をすればいいのかわからなくなっている。何もしなければ失敗はない。経験するしかない。外づらと内づらの自分が違う。一貫性ない自分に不安。

○支援者同士も分かり合える場が必要

「共感しなければいけない」は難しい。なかなか分かり合えない。分かり合えないから戦争が始まる。共感は大それたけれど、不一致も大事。分かり合えなかったことがわかる。お互いが浄化しあう場面。抱え込める場が安心安全。共感をする。なんで分からないのか悩まない。子どもの気持ちに沿って話し合うことが重要。

分科会Ⅱ 行政連携 自治体職員の“実践”と制度枠組み

コーディネーター 南出 吉祥 氏 (岐阜大学)

日比 英二 氏

(名古屋市仕事・暮らし自立サポートセンター大曾根)

スピーカー 安倉 晃平 氏 (泉南市役所)

若園 優 氏 (岐阜県ひきこもり地域支援センター)

① 「基礎自治体職員の若者・ひきこもり協同実践領域における実践報告と行政と民間の協働に関する一考察」安倉 晃平 氏

本当に困っている人は窓口に来ない。それをどうやって拾い上げるのか。
支援策は、パンドラの箱。使うと予算オーバーになる不安がある。

若者支援関連施策は、就労支援のイメージであり、それ以外は十分ではない。
協働といいながら、行政は民間事業者を下請け団体にする。

市民団体は行政に要望・要求を行うばかりで課題解決に向けた協働には不参加。委託事業の取り合いに。

② 「岐阜県ひきこもり地域支援センターの取り組み」若園 優 氏

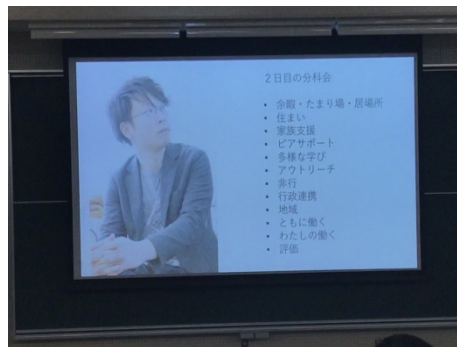
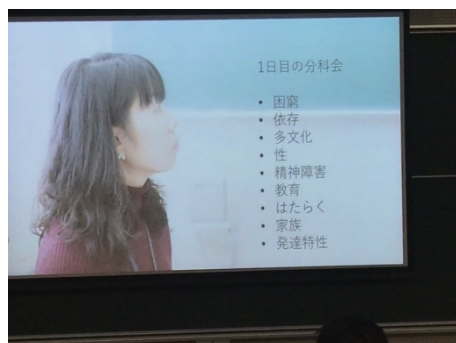
- ・ひきこもり支援センターは県内 1 か所（岐阜市）しか無く、相談者は遠くて来られない人がいる。相談者は岐阜市周辺の家族と当事者である。
- ・多様なアプローチ、支援が困難。
- ・行政の担当は複数に渡る。

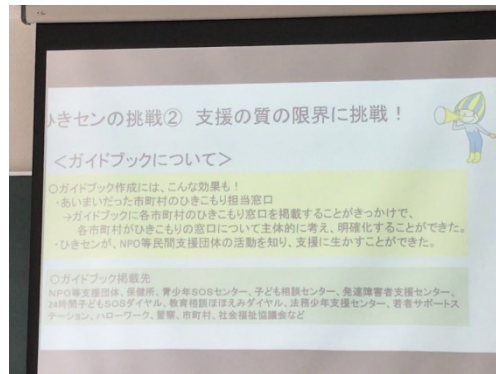
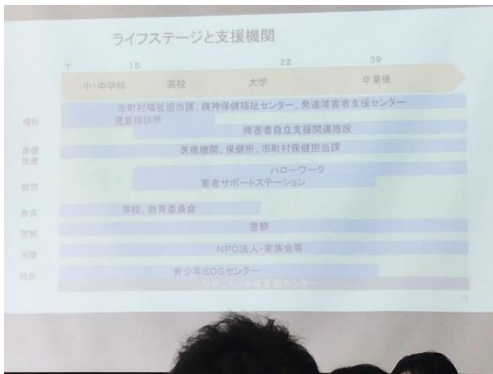
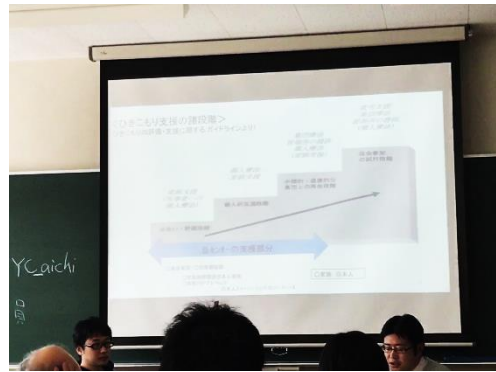
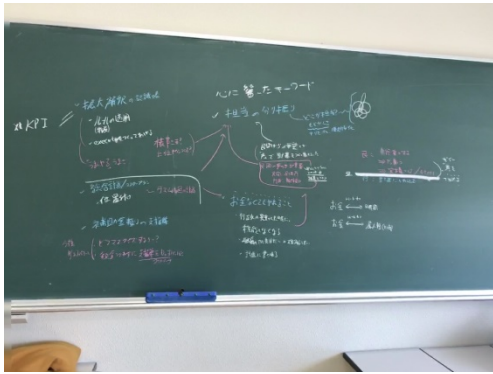


市町村や支援団体などと連携強化

- ・相談会・連絡会を連携して開催。
- ・技術援助や人材育成などの市町村支援。
- ・市町村相談窓口の明確化。

※写真





所感

民生費が年々増加する中で、若者支援の立ち位置を確立していかなければ前に進めることが出来ないと感じている。市町村の担当がはっきりしていない状況で国や県が旗を振っても難しいのでは。今後も市民の理解を深め、官と民が協働して実践をしていけるような仕組みづくりを提案していきたい。未来に希望と夢が持てる地域づくりにまい進したい。